



TITLE:

抒情的五言詩の成立について

AUTHOR(S):

松家, 裕子

---

CITATION:

松家, 裕子. 抒情的五言詩の成立について. 中國文學報 1990, 42: 1-29

ISSUE DATE:

1990-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177475>

RIGHT:

## 抒情的五言詩の成立について

松 家 裕 子

追手門學院大學

中國文學の主要なジャンルの中には、成立事情が明らかになっていないものが少なくない。それらの多くは、民間の口承文藝を起源とするといわれてはいるものの、具體的にその源流としてあったであろう民間文藝がどのようなものであったのか、またそこからどのような過程を経て成立してきたのか、などということになると、全く、或は十分には解明されていないのが現状である。

中國文學の中で長くその流れの中心にあった五言詩とその例外ではない。五言詩の成立については、『文心雕龍』明詩篇に、「古詩は修辭から推察するところ兩漢の作であろうか」<sup>(1)</sup>とみえるのをはじめとして、爾來多くの人々がそれにかかわる發言をしてきた。しかし、今もその成

抒情的五言詩の成立について（松家）

立の経緯については、ほとんど明らかになっていないと言つてよいであろう。五言詩の成立について説くものほとんどは、それが歌謠から生まれたものであるという。たしかに、文人達が全く何もなかったところからこの新しい文學形式を作りあげたとは考えにくいし、また實際初期のものであろう五言詩には歌謠的要素が隨所にみられる。おそらく五言詩が歌謠となんらかのかかわりを持ちながら生まれてきたものであることは間違いないであろう。それでは、その歌謠とはどのようなものであったのか。このとき必ず言及されるのが、漢代の歌謠であったとされる樂府相和歌の古辭（以下便宜上「相和歌」とのみ記す）との關係である。五言詩の初期の作品と相和歌の關係はたしかに輕視できない。兩者は予想される成立年代も接近している。また、相和歌には五言で一句をなすものが多く、さらにその中には五言古詩にみられるものと類似の句もみられる。特に、相和歌の「西門行」古辭は「古詩十九首」の中の「人生百に滿たず」<sup>(2)</sup>の詩と、若干の異同はあるものの本來同一物であったと考えられ、しばしば五言詩と相和歌の關係を示す例に用

いられる。けれども、實際には相和歌と呼ばれるものの中には、内容・形式ともにさまざまな歌が含まれており、それらがどのような歌謡であったのかもよくわかっていない上に、現存の歌辭がどの程度漢代の歌謡としてのありさまを傳えているのかも定かではない。このような歌謡を比較對照の材料として五言詩の成立を考えようとすることは、有効な方法とはいえないであろう。五言詩が「古詩十九首」やいわゆる蘇武・李陵の詩などの完成された作品群としてあらわれるまでには、文字による記録にはあらわれない水面下でたいへんに複雑な過程があったはずである。それは、決して現存する文字資料を直線的につなぎあわせただけで、簡単に説明できてしまうものではないにちがいない。

そこで、小論では、五言詩成立の問題を解くための一つの試みとして、初期の五言詩やそれと關連するであろう樂府全體を見わたしながら、對象を特に「古詩十九首」などの初期の抒情的五言詩（以下便宜上「五言古詩」と呼ぶ<sup>(4)</sup>）に限定し、主としてその内容と表現に注目して、それらがどのような土壤から生まれてきたものであるかを、新しい視點

を提出しつつ探ってみたい。

# 一

ここでとりあげる五言古詩には、全體にわたってみられるある基調といったものが存在する。五言古詩はこの世のあらゆることをうたうわけではなく、その内容は實に非常に限定されている。抒情詩とはいっても、甘い戀心や人生への憧れがうたわれるわけではない。そこに流れる感情は一貫して「悲しみ」に傾き、なおかつその「悲しみ」の對象も人生のあらゆる悲しみではなく、いくつかのものに限られているのである。たとえば、「古詩十九首」について、沈德潛はそこにうたわれるものが「おおむね、主君にうとんじられた臣下、夫にすてられた妻、友人との遙かな別離、他郷にある旅人、人生無常の感<sup>(5)</sup>」に盡くされるという。また、吉川幸次郎博士は「古詩十九首」のテーマをさらに抽象的に「推移の悲哀」と名づけられた<sup>(6)</sup>。これも、十九首に一貫した共通性があることからそれに注目し、それを歸納しようとしたものであろう。しかし、吉川博士のこの作

業は、「古詩十九首」の研究にとって有意義なものではあったけれども、そこに一つの抽象的なテーマを求めることには少し無理があったようにも思われる。今「古詩十九首」の各首について、こころみにそれらの内容をできるだけ具體的かつ簡潔にまとめてみると次のようになるであろう。

- |            |                      |
|------------|----------------------|
| 一、「行行重行行」  | 男女の離隔・時の推移           |
| 二、「青青河畔草」  | 男女の離隔                |
| 三、「青青陵上陌」  | 人生短促・宴席・行樂           |
| 四、「今日良宴會」  | 宴席・音曲・人生短促・富貴の<br>勸め |
| 五、「西北有高樓」  | 音曲・杞梁の妻（男女の離隔）       |
| 六、「涉江采芙蓉」  | 男女の離隔・植物の贈り物・望郷      |
| 七、「明月皎夜光」  | 時の推移・友人の疏遠           |
| 八、「冉冉孤生竹」  | 男女の離隔・時の推移           |
| 九、「庭中有奇樹」  | 男女の離隔・植物の贈り物         |
| 十、「迢迢牽牛星」  | 牽牛と織女（男女の離隔）         |
| 十一、「廻車駕言邁」 | 時の推移・榮達の願望           |
| 十二、「東城高且長」 | 時の推移・音曲・快樂（美人）の      |

抒情的五言詩の成立について（松家）

追求

- |            |                        |
|------------|------------------------|
| 十三、「驅車上東門」 | 人生短促（死）・快樂（酒など）<br>の追求 |
| 十四、「去者日以疎」 | 人生短促・望郷                |
| 十五、「生年不滿百」 | 人生短促・快樂（宴席など）の追求       |
| 十六、「凜凜歲暮」  | 時の推移・男女の離隔             |
| 十七、「孟冬寒氣至」 | 男女の離隔・手紙               |
| 十八、「客從遠方來」 | 男女の離隔・贈り物              |
| 十九、「明月何皎皎」 | 望郷                     |

これからみてとれるように「古詩十九首」にはいくつ  
か突出して多くうたわれていることがらがあるのである。

それはほぼ以下の四項にまとめられるといつてよいだろう。

- |                   |
|-------------------|
| 一、男女（時に友人間）の離隔    |
| 二、時の推移と人生短促       |
| 三、望郷              |
| 四、快樂の追求と宴席（音曲も含む） |

そして、さらに廣く五言古詩全體にわたってみても、ま  
たこれと同様の特徵が見てとられるのである。いわゆる李

陵と蘇武の五言古詩や、『玉臺新詠』卷一に收録される秦嘉と徐淑なる夫妻の間でやりとりされたものとされる五言古詩が、いずれも時の推移や宴席的な要素を織りまぜつつ、男女の離隔をいうものになっていることはもちろんである。また各書に散見する五言古詩や一部の相和歌にも同じ特徴がみられる。そしてさらに、建安の詩人達の五言古詩にも、既に他の要素はいりこみ少し複雑になってはいるものの、やはりこれらの特徴は顯著にあらわれているのである。

それでは、五言古詩にこうした内容上の特徴がみられるのは一體なぜなのであろう。まず四の「快樂の追求と宴席」に關するものであるが、これは他の三つの特徴とは由來を異にするものと考えられる。即ち、五言古詩が、宴席という場を経て成立したものであることを反映したものと解することができよう。たとえば「古詩十九首」の「生年不滿百」の詩をみてみよう。

生年不滿百 生年 百に滿たず  
常懷千歲憂 常に千歳の憂を懷く  
晝短苦夜長 晝の短かくして夜の長きに苦しむ

何不秉燭遊 何ぞ燭を秉りて遊ばざる  
爲樂當及時 樂しみを爲すに當に時に及ぶべし  
何能待來茲 何ぞ能く來茲を待たんや  
愚者愛惜費 愚者は費えを愛惜し  
但爲後世嗤 但だ後世の嗤いと爲る  
仙人王子喬 仙人 王子喬  
難可與等期 與に期を等しくすべきこと難し

五言古詩の中には、詩の感情が一點に結晶しようとする普通の抒情詩に對すると同じ方法をもってしてはうまく扱いきれぬものがあるが、これもその一つといえよう。最初と最後の二聯からは人生短促を嘆く詩と讀めるけれども、詩は完全にそこに收束しきつてはいない。この詩は、むしろ宴席において樂しみを盡くすことを勧めるのが主であり「人生は短かい」はそのきっかけとして讀む方が、本來の姿に近いのではないか。「古詩十九首」には他にも「斗酒もて相娛樂せん」や「宴を極めて心意を娛しません」(いずれも「青青陵上陌」<sup>(8)</sup>より)など、宴席で酒を勧める表現からきたと推察される句がみられる。また『玉臺新詠』卷一に收

録されている香鑪をうたった五言古詩は「四坐<sup>しや</sup> 且<sup>しか</sup>誼<sup>ぎ</sup>くすしゅうすること莫かれ、願わくは一言を歌うを聴け<sup>(9)</sup>」という一座の者への呼びかけからはじまっている。これらも五言古詩と宴席との關係を示す例といえよう。一般に、知識人が非知識人的の世界にある歌謡を受容しやがて自分達も作者となって新しい文學形式を作り出す時、最も一般的にその媒介となりうるのは、たとえば「詞」にみられるように、宴席という場である。五言古詩の成立にあたって、おそらく宴席は重要な役割をはたしたのであろう。その中に宴席や快樂追求を促す内容が多くみられるのは、その反映であると理解できる。

では残る三つの特徴についてはどうであろう。なぜこれらのことが多くうたわれなくてはならなかったのであろうか。これについて容易に得られるのが次の二つの答えであろう。まず一つは、これらのことがら、即ち簡単にいえば「愛」と「死」が人の心を最も強く搖さぶるものだから、というものである。たしかにこれらは古今東西の文藝の主要なテーマであるに違いなく、この答えも全く的の外れと

はいえない。しかし、ではなぜさまざまある「愛」の中で別れた男女のものばかりがうたわれなくてはならなかったのか。次の二つめの答えがこれについて説明を與えてくれるかもしれない。即ち、五言古詩のこれらの特徴は、これらの詩の背景となったのが亂離の時代で、人々が實際にしばしば家族や故郷と離れたり死に直面したりすることを餘儀なくされていたことからくる、と。この答えは一應の説得力があり、ある程度眞實を反映したものであるには違いない。しかし、これだけの理由であらうか。ではなぜそこに描かれているのは、男女(時に友人間)の別ればかりなのであろう。

五言古詩は言うまでもなく知識人によって完成されたものであり、そこには知識人的要素が色濃くあらわれている。特に「古詩十九首」や李陵・蘇武のものは、知識人の教科書である『文選』にも收録されて、知識人の作品と全く同じように扱われてきた。しかし、先にもふれたように、五言古詩はそのような方法だけではなお扱いきれない要素をもつ。これらの特徴も、作者(達)の内的な要因のみから説

明するのでは不十分なのではないか。これらの特徴は、五言古詩という文學形式の本質とかわるものなのではないだろうか。以下、これらの特徴のもつ意味をもう少し續けて探してみたい。

二

五言古詩は、そこにうたわれる内容が限定されているだけでなく、實はその表現においても、いくつもの詩に繰り返しあらわれる、決まり文句とでも呼べるようなものが認められる。その特徴をよりはっきりと知るために、母集團を建安の詩人達の作品と相和歌にまで擴大して調べた結果を以下に擧げてみた。まず目につくのが、人生の短促をいう次のような表現である。

人生寄一世	古詩十九首	今日良宴會
人生非金石		廻車駕言邁
年命如朝露		驅車上東門
人生忽如寄	同右	
人生無幾時	『玉臺新詠』卷一	古詩 悲與親友別

人生譬朝露	秦嘉 贈婦詩	人生譬朝露
人命不可延	『後漢書』趙壹傳	詩
人生幾何時	悲憤詩	
人命一何促	『樂府詩集』卷四十一	怨詩行古辭

また、離隔にかかわる表現はずっと種類も多くなる。まず、自分と心に想う對象（人または場所）が遠く隔たっていることをいう表現として次のようなものが頻出する。

各在天一涯	古詩十九首	行行重行行
各在天一隅	李陵 與蘇武詩	良時不再至
各在天一方	蘇武 詩	燭燭晨明月
各在天一方	徐幹 室思	
相去萬餘里	古詩十九首	行行重行行
相去萬餘里		客從遠方來
相去悠且長	蘇武 詩	燭燭晨明月
相離三千里	『漢書』外戚傳	戚夫人歌
道路阻且長	古詩十九首	行行重行行

長路漫浩浩 古詩十九首 涉江采芙蓉

道遠會見難 『玉臺新詠』卷一 古詩 悲與親友別

迴路險且阻 悲憤詩

涉路險且夷 阮瑀詩 我行自凜秋（『藝文類聚』卷二十七）

道遠歸還難 『宋書』樂志 豔歌何嘗行古辭

悠悠涉遠道 古詩十九首 迴車駕言邁

悠悠隔山坡 冉冉孤生竹

悠悠兮離別 徐淑 答（夫）詩

悠悠三千里 悲憤詩

悠悠萬里道 徐幹 室思

悠悠涉千里 應瑒 別詩 朝雲浮四海（『藝文類聚』卷二十九）

このように、兩者の離隔は主にそれらを結ぶ「道」の長さによってあらわされるが、また次のように兩者の間に障害があることを言う表現も、類似的の句がいくつかみられる。

欲歸道無因 古詩十九首 去者日以疎

抒情的五言詩の成立について（松家）

河廣無舟梁

道近隔丘陵 秦嘉 贈婦詩 皇靈無私親

欲濟河無梁 曹丕 雜詩

褰衽欲從之 王粲 雜詩

路險不得征

思欲一東歸

山深橋梁絕 曹操 苦寒行

欲歸家無人

欲濟河無船 『樂府詩集』卷六十二 悲歌行古辭

次のように兩者が會いがたいことをそのまま表現するものもある。

會面安可知 古詩十九首 行行重行行

相見未有期 蘇武詩 結髮爲夫妻

念別無會期 悲憤詩

何時復交會 同右

會合安可知 曹丕（徐幹）於清河見輓船士新婚與妻別

また、想う人が去ったことをいうものもある。

遊子不顧反 古詩十九首 行行重行行



蕩子行不歸

青青河畔草

念子棄我去

『玉臺新詠』古詩 悲與親友別

君行殊不返

徐幹 情詩

君獨無返期

徐幹 室思

逆に旅人が故郷を思うことをいうものも多い。

征夫懷遠路

蘇武 詩 燭燭晨明月

征夫懷親戚

王粲 從軍 涼風厲秋節

征夫心多懷

從軍征遠路

遊子戀故鄉

蘇武 詩 燭燭晨明月

遊子暮思歸

李陵 贈蘇武詩 樂樂三星列（『藝文類聚』

卷二十九）

遊子戀故廬

同右

遊子戀所生

『樂府詩集』卷三十 長歌行古辭

また、詩の中で高まった感情は多く次のような表現であ  
らわされる。

泣涕零如雨

古詩十九首 迢迢牽牛星

垂涕沾双扉

凜凜歲云暮

淚下沾裳衣

明月何皎皎

淚下不可揮

蘇武 詩 黃鵠一遠別

淚下兮沾衣

徐淑 答（夫）詩

涕泣灑衣裳

劉楨 贈五官中郎將 秋日多悲懷

淚下不可收

王粲 從軍 悠悠涉荒路

淚落縱橫垂

『玉臺新詠』卷一 古樂府詩 雙白鶴（豔

歌何嘗行）

淚下沾羅纓

『樂府詩集』卷三十 長歌行古辭

「徘徊」「彷徨」「踟躕」といった、たちもとのおる動作も  
感情表現の一つとして多くみられる。

攬衣起徘徊

古詩十九首 明月何皎皎

出戶獨彷徨

同右

沈吟聊躑躅

東城高且長

執手野踟躕

李陵 贈蘇武詩 良時不再至

徘徊蹊路側

携手上河梁

千里顧徘徊

蘇武 詩 黃鵠一遠別

佇立兮徘徊

徐淑 答（夫）詩

褰裳路踟躕

彷徨不能歸

李陵 贈蘇武別詩 晨風鳴北林（『藝文類

聚』卷二十九)

披衣起彷徨 曹丕 雜詩

徘徊不能去 王粲 雜詩

また、鳥の比喩がきわだつて多く用いられ、しかもそれらの多くが「願わくは鳥となりて」という決まった表現になっている。

願爲雙鳴鶴

奮翅起高飛

古詩十九首 西北有高樓

思爲雙飛燕

銜泥巢君屋

東城高且長

願爲雙黃鵠

送子俱遠飛

蘇武 詩 黃鵠一遠別

恨無兮羽翼

高飛兮相迫

徐淑 答(夫)詩

願爲晨風鳥

雙飛翔北林

曹丕 清河作詩

願爲雙黃鵠

比翼戲清池

曹丕 (徐幹) 於清河見輓船士新婚與妻別

抒情的五言詩の成立について(松家)

このように、五言古詩には決まり文句的な表現が多くみられる。これは一體なぜであろうか。あるいは次のようにも考えられるかもしれない。これらは當時たいへんにはやった言いまわしなのだ。近代的な意味での「獨創」が重視されなかったこの時代に、類似の表現が多くの詩にみられるのは當然のことではないか、と。たしかに、五言古詩の有名、無名の作者達にとって、これらは當時よく行われていた言いまわしの借用であり變形ではあっただろう。しかし、これらの決まり文句的表現は先にみた五言古詩の内容上の特徴とも密接にかかわっている。これは、單に「流行」や「表現の借用」といったレベルだけで解けてしまう問題ではないのではないか。五言古詩が歌謡から生まれたものであるならば、これらの内容上・表現上の特徴は、それらの五言古詩の源流にあった歌謡からきたものなのではないか。

しかし、このように考えるとき問題となることがある。

それは、前掲の決まり文句的表現の中に、『文選』李善注も指摘するように、明らかに『詩經』『楚辭』などの先行

する文藝に基くものがあることである。たとえば、「道路阻<sup>は</sup>まれて且つ長し」は、『詩經』秦風・蒹葭に「道阻まれ  
て且つ長し<sup>100</sup>」というのによる。また「泣涕零<sup>お</sup>つること雨の如し」は、同じく『詩經』邶風・燕燕に「泣涕 雨の如し<sup>101</sup>」とあるのによる。「願わくは雙の鳴鶴と爲り 翅を奮いて  
起ちて高飛せん」は『楚辭』に收録される王褒「九懷」陶  
璜に「將に翼を奮いて高飛せんとす<sup>102</sup>」とあるのによるもの  
であろう。

しかし、さらに五言古詩と『詩經』『楚辭』とをあわせ  
みると、そこにはもう一つ、より本質的な共通點がみいだ  
されるのである。たとえば、先にとりあげた「道 阻まれ  
て且つ長し」の句を含む『詩經』秦風・蒹葭の一章をみて  
みよう。

蒹葭蒼蒼	蒹葭 蒼蒼として
白露爲霜	白露 霜と爲る
所謂伊人	所謂 伊 <sup>か</sup> の人
在水一方	水の一方に在り
溯洄從之	溯洄して之に従わんとすれば

道阻且長 道 阻まれて且つ長し  
 溯游從之 溯游して之に従わんとすれば  
 宛在水一方 宛<sup>きなか</sup>らに水の一方に在り  
 古注に諫言とするのはさておき、新注も具體的に何をい  
 うものかわからぬとする<sup>104</sup>。この詩のみから得られるごく素  
 直な解釋は、目加田誠博士のいわれる「川の向うの念う人  
 を、あこがれ求める美しい歌<sup>105</sup>」というものであろう。また、  
 次の『詩經』周南・漢廣も、古注・三家詩説に諸説あるも  
 のの、まずは同様のものと讀めるであらう。その一章を擧  
 げる。

南有喬木	南に喬木有れども
不可休息	休むべからず
漢有游女	漢に游女有れども
不可求思	求むべからず
漢之廣矣	漢の廣きは
不可泳思	泳ぐべからず
江之永矣	江の永きは
不可方思	方 <sup>いかだ</sup> すべからず

先にみた決まり文句的表現に「渡りたいのに橋がない」というものがあつたことを思い出させるものといえよう。これらの詩篇の、愛する者との間に障害があつて想いがとげられないというテーマは、多くの五言古詩と共通するものである。『楚辭』になると、句の構造が異なり一見して五言古詩との類似をみてとれる表現はなくなるが、逆にその内容はさらに接近する。そこには、予備知識を排除して讀んだ場合には男女の間の成就しない愛情をいうとうけとられる表現が、詩のテーマそのものと深くつながりつつ、多くみられるのである。「九歌」にみられる例をいくつか挙げてみよう。

「思夫君兮太息

夫の君を思いて太息し

「極勞心兮懣懣

極めて心を勞し懣懣たり（雲中君）

「隱思君兮徘徊

隠く君を思いて徘徊す（湘君）

「怨公子兮悵忘歸

公子を怨みて悵として歸るを忘る

（山鬼）

「思公子兮徒離憂

公子を思いて徒らに憂いに離る（同）

（右）

抒情的五言詩の成立について（松家）

また、特に「少司命」の「悲しみは生きて別離するより悲しきは莫し」の表現は、五言古詩にしばしば借用される。さらに「離騷」にも「路は曼曼として其れ脩遠なり」と道の長さをいうもの、あるいは「日は忽忽として其れ將に暮れなんとす」と時の推移をいうものなどがみられる。『楚辭』に多く飛翔の表現がみられることもよく知られていることである。

このように、五言古詩には内容・表現ともに、先行する文學である『詩經』との、そしてさらに著しくは『楚辭』との共通性がみられる。それでは、先に見たいいくつかの内容上の特徴も含め、五言古詩の主要な要素は純粹に知識人的なものに由來すると考えるべきなのであろうか。しかし、これではまたそこにみられる非知識人的要素が説明不可能となってしまう。五言古詩の「道路阻まれて且つ長し」という表現は、たしかに知識人が『詩經』を典故として作り上げた句である。しかし、知識人がこの典故を用いた背景には、またその源流となった歌謠の中に類似の句があつたことが考えられるのではないだろうか。それを示唆するの

が、前漢の鏡の銘文にみられる類似の表現である。

前漢の鏡の銘文に抒情詩的性格をもつものがあることは、既に指摘のあるところである。<sup>21)</sup>そして、それらの中には、抒情詩的性格をもつのみならず、五言古詩との間にいくつかの共通点があり、漢代の文學や五言古詩の成立を考える上で無視することのできない重要な資料であるといえよう。ここでは、まず次の例をみてみよう。

道路遠 道路遠く

侍前希 前に侍すること稀なり

昔同起 昔 同に起きしに

予心悲 予が心 悲しむ (草葉文鏡Ⅱ)<sup>22)</sup>

まず、五言古詩の決まり文句的表現に似た「道路 遠し」という表現が注目される。しかし、これらの銘文の五言古詩との共通点はそれのみにとどまらない。まず第一に、別離の悲しみをテーマとしていること。第二に、その悲しみが一人稱(予)を用いて相手に訴えかける形式が述べられていること。これらは兩者の類似が、單に似ているというだけではなく、より本質的なものであることを窺わせるもの

であろう。次の銘文になると、五言古詩との関係はますます顯著にあらわれてくる。

君有行 君に行く有り

妾有憂 妾に憂い有り

行有日 行くに日 有れども

反母期 反るに期 母し

願君強飯多勉之 願わくは君 強いて飯くい多く之に

勉めよ

仰天大息 天を仰ぎて大息す

長相思母久忘 長く相思いて久しく忘るる母れ

(異體字銘帶鏡Ⅰ)

一人稱(妾)と二人稱(君)を用いて離隔の悲しみをいうことに加え「反るに期 母し」など、五言古詩との共通点が多い。とりわけ注目されるのが「願わくは君 強いて飯くい多く之に勉めよ」の一句が「古詩十九首」の「行行重行行」の結句「努力して餐飯を加えよ」と似ていることである。<sup>24)</sup>「古詩十九首」の中でも特にこの句は解釋のしにくいものといえよう。「どうかあなたもがんばって、ごはんも

しっかり食べて下さい」という解釋に一應はうなづける。

けれども、なぜこのようにしつとりと悲しい抒情詩が「餐飯」などという妙に生活臭のすることばでしめくぐられなければならなかったのであろうか。

「しっかり食事をとって下さい」ということばは、鏡銘にみえることから考えて、詩のことばである前に、まず人々の日常生活により密接にかかわっていたある種の決まり文句であったのではないか。おそらくはそのことばは五言古詩の源流となったであろう歌謠の中にも存在していたものであろう。そうして知識人の手が入った五言古詩の中に、少々そぐわないながらも残存するような格好であらわれたものではないだろうか。「道路阻まれて且つ長し」といった表現についても、また同様のことが考えられる。

「道路遠し」ということばが鏡銘にみえることから推察されるように、それは、純粹に詩のことばである以前に、人々の生活に何らかの形でかわりあっていった決まり文句として存在したのであり、それが、詩の表現となる際に詩人の手によって『詩經』等に典故をもつものになったのだと

推測される。

このように、五言古詩において、ある表現が先行の文學作品を典故とするということは、必ずしもその表現が歌謠から來たものであることを否定するものではないと考えられるが、これは内容の類似についても言えることではないだろうか。即ち、五言古詩が『詩經』や『楚辭』と共通性をもつことは、ただちにそれらの直線的つながりを意味するものとは限らないのである。ここでの兩者の共通性は、あるいは、五言古詩の源流としてあったであろう歌謠が、『詩經』や『楚辭』と何らかの共通性をもっていたことに由來すると考えられるからである。

「九歌」にみられる遂げられぬ愛の表現が、實際にはこれらの歌謠を生み出した場である祭祀において神に向けられたものであったことは周知のごとくである。そして、先に挙げた『詩經』の二例も、實は單なる戀の歌ではなく水神のまつりにおいてその女神をさしたものであること、白川靜博士の指摘されるとおりであろう。五言古詩の成立についてこれらと同じことがいえるのではないだろうか。

即ち、そこにみられる遂げられぬ愛の表現も、その源流となった歌謡の中ではこの世に生きる男女のものではなく、神かあるいはそれに類した「この世ならざるもの」に對するものだったとは考えられないだろうか。

三

ここに、五言古詩における愛情の表現が「この世ならざるもの」に向けられうるものであった可能性を窺わせる資料が一つある。それは、宋の沈适の編んだ『隸釋』卷九に記録されている後漢末期の碑文「費鳳別碑」である。費鳳は、同じく『隸釋』卷九に收められている「堂邑令費鳳碑」から、後漢靈帝の熹平二年（一七二）に没したことがわかる。碑文の作者石勛については詳しい事跡はわからない。その碑文はなかほどからはば完全に五言一句の詩となる珍らしいものであるが、ここではその五言の部分の後半、費鳳の死をいうところから最後までを挙げる。

不悟奄忽終

悟らざりき 奄忽として終わり

藏形而匿景

形を藏し景を匿さんとは

耕夫釋耒耜	耕夫 耒耜を釋て
桑婦投鉤莒	桑婦 鉤莒を投ぐ
道阻而且長	道 阻まれて且つ長く
望遠淚如雨	遠きを望めば 涙 雨の如し
笑馬循大路	馬に笑て大路に循い
褰裳而涉洧	裳を褰げて洧を渉る
悠悠歌黍離	悠悠として黍離を歌い
思黃鳥集于楚	黃鳥の楚に集まるを思ふ
惻惻之臨穴	惻惻として 之 穴に臨み
送君於厚土	君を厚土に送る
嗟嗟悲且傷	嗟嗟として悲しみ且つ傷み
每食□不絕	食する毎に□絶え（飽か？）ず
夫人篤舊好	夫人 舊好に篤く
不以存亡改	存亡を以て改めず
文平感渭陽	文平（？）渭陽に感じ
悽愴益以甚	悽愴 益ます以て甚し
諸姑咸擗踊	諸姑 咸な擗踊し
爰及君伯姊	爰に君の伯姊に及ぶ

孝孫字元宰

孝孫 字は元宰

生不識考妣 生まれながらにして考妣を識らず

追惟厥祖恩 厥の祖恩を追惟し

蓬首斬纒杖 蓬首 斬纒にして杖つく

世所不能爲 世の爲す能わざる所にして

流稱於鄉黨 郷黨に流稱せらる

見吾若君存 吾に見ゆるに君の存するが若く

剝裂而不已 剝裂して已まず

壹別會無期 壹たび別るれば會うに期無く

相去三千里 相い去ること三千里

絶翰永忼慨 翰を絶ちて永く忼慨し

泣下不可止 泣<sup>なみだ</sup> 下りて止むべからず

「道阻<sup>みちこま</sup>まれて且つ長し」や「泣 下りて止むべからず」

といった五言古詩の類型的表現を含んでおり、かつ年代もほぼ確定できることから、後漢末の文學史を考える上で重要な資料といえるだろう。「耕夫 耒耜を釋て、桑婦 鉤芻を投ぐ」の二句は、相和歌「陌上桑」古辭の「耕す者は其の犁を忘れ、鋤く者は其の鋤を忘る」と類似することな

抒情的五言詩の成立について（松家）

ども興味深い。しかし、ここで注意したいのは、いくつかの五言古詩の決まり文句的表現が人の「死」とかわって用いられていることである。特に最後の「壹たび別るれば會うに期無く、相去ること三千里」は死者をさしていつてゐるもので、これらの五言古詩では愛情の表出とみえたものが「この世ならざるもの」、即ち死者に對して用いられるものであったことを示すものとして注目される。

ここで思い出されるのが、五言古詩のもう一つの内容上の特徴であつた「時の推移と人生短促」である。これらは當然「死」とも深くかわつてくる。實際、吉川博士もいわれるとおり「古詩十九首」やその周邊の詩には、「死」が色濃く影を落としている。十九首のうちの二首は墳墓の形象を含むが、特に次に擧げる「驅車<sup>きしや</sup>上東門」の前半はそのイメージが鮮烈である。

驅車<sup>きしや</sup>上東門 車を上東門に驅り

遙望<sup>遙</sup>郭北墓 遙かに郭北の墓を望む

白楊何蕭蕭 白楊 何ぞ蕭蕭たる

松柏夾<sup>か</sup>廣路 松柏 廣き路を夾む



下有陳死人 下に陳しく死せる人有り

杳杳即長暮 杳杳として長暮に即く

潛寐黃泉下 潛かに黃泉の下に寐ね

千載永不寤 千載 永く寤めず (後略)

濃厚な死のイメージはさらに建安の作家達の作品にもみ  
てとれる。「白骨 平原を蔽う」という句を含む王粲の「七  
哀詩」もその例であらうし、繆襲に「挽歌詩」のあること  
は『文選』にも收録されて有名である。なぜ五言古詩と  
「死」は深くかかわっているのだろうか。ここから予測さ  
れるのが、五言古詩と死者儀禮との關係である。五言古詩  
の源の一つは死者儀禮、より具體的には死者儀禮における  
歌謠に求められるのではないだろうか。

「死」や離れてゆくものへの呼びかけといった問題のみ  
ならず、先に挙げた五言古詩の特徴の多くが、このように  
考えることによって説明可能となる。たとえば、決まり文  
句的表現の一つであった「道阻まれて且つ長し」式のもの  
も、もとはこの世の二點ではなく、この世とあの世につい  
ていったものであったと考えられる。人が死後に道ゆきを

するというのは、古い層に屬するとともに今日に生きる私  
達の心にも残る普遍的な他界觀であるが、そこではこの世  
とあの世は長い路でつながっていると考えられる。また、普通  
その道ゆきはたとえば「三途の川」のような障害をともしな  
ったつらいものであるとされ、「河を渡りたいのに舟がな  
い」など兩者の間の障害をいうものはその反映と考えられ  
る。また、「願わくは鳥となつて……」というものがあつ  
た。五言古詩には他の動物の比喩はほとんどみられない中  
に、鳥の比喩や飛翔の形象はきわだつて多く、これらは以  
後も五言詩の重要な要素となるものである。五言古詩に、  
特に「鳥になりたい」という表現が多いのはなぜなのか。  
これについては、鳥の特殊な性格に注目しなければなら  
ない。即ち、鳥はしばしば神や人間の魂が姿をかえたものと  
されるのである。ヤマトタケルの白鳥傳説なども有名であ  
るが、また『後漢書』章帝本紀の元和二年二月にみえる次  
のような紀事もその例であるといえよう。

辛未、太山に幸し岱宗に柴告す。黃鵠三十有、西  
南より來たり、祠の壇上を經、東北のかた宮屋を過り、

翺翔升降<sup>84</sup>す。

相和歌の「豔歌何嘗行」の冒頭に、「飛び來たり 雙<sup>つが</sup>の白鴿、乃ち西北より來たり」と、「鴿」が飛んで來ることをその方角とともにいう、ここにみえる「黃鴿三十有り、西南より來たり」と酷似した表現がある。この相和歌の中の方角は詩の内容には何らかかわりがなく、なぜそこに方角が明示されなければならなかったのかわかりにくい。章帝本紀にみえる鳥の來臨は、明らかに宗教儀禮における神のそれであり、それゆえに來たる方角も重要であったのだろう。そうして相和歌のそれと酷似した表現もおそらく來源は同様に宗教的な儀禮にさかのぼりうると考えられる。五言古詩に鳥の比喩が多く用いられるのも、同様にそれらの詩が宗教的な儀禮の場を一つの重要なみなもととすることの反映といえるのではないだろうか。

第三の内容上の特徴であった「望郷」は、あるいは死者儀禮とかかわりなく五言古詩に入りこんだ可能性もある。しかし、同時代的な資料ではないけれども、人は死後「望郷臺」なるもののほりこの世をふり返って眺めるのだと

抒情的五言詩の成立について（松家）

信じられていた例がみられ、あるいはここにみえる「望郷」も死者儀禮と關係するものと予想される。その一つは元雜劇『寶娥冤』の第四折。恨みをのんで死んだ寶娥は、父天章の夢にあらわれ次のようにうたう。

〔双調新水令〕 我毎日哭啼啼守住望郷臺（日ごとしとどに泣きぬれて、離れもあえぬ望郷臺） （元曲選本）

ここにいう「望郷臺」が單に文藝創作上の思いつきというだけではなかったことは、また次の資料からも窺われるところである。

【忘哭（なくことをいむ）】 安徽省壽縣に以前あった葬送儀禮。人は死ぬと入棺後三日目に魂が望郷臺にのぼるのだと考えられていた。このため、この日には親族はなくことをいんだ。<sup>85</sup>（後略）

これらのことから、五言古詩の「望郷」は、あるいは死者を一人稱とする歌がもとにあり、そこから來たものではないかと考えられる。五言古詩の源流に死者の一人稱による歌があったことをさらに強く窺わせるのが、早く建安の詩人の詩にみえる死者の獨白體の詩である。一首は前述の

繆襲の「挽歌詩」、そしてもう一首は『藝文類聚』卷三十  
四に收録される阮瑀の「七哀詩」である。

生時遊國都	生時	國都に遊び
死没棄中野	死没して	中野に棄てらる
朝發高堂上	朝に	高堂の上を發し
暮宿黃泉下	暮に	黃泉の下に宿る
白日入虞淵	白日	虞淵に入り
懸車息駟馬	懸車	駟馬を息わす
造化雖神明	造化	神明なりと雖も
安能復存我	安んぞ	能く復た我を存せんや
形容稍歇滅	形容	稍く歇滅し
齒髮行當墮	齒髮	行くゆく當に墮つべし
自古皆有然	自古	皆然る有り
誰能離此者	誰か	能く此を離るる者ぞ

丁年難再遇      丁年      再び遇い難く  
富貴不重來      富貴      重ねて來たらず  
良時忽一過      良時      忽ち一たび過ぎ

(繆襲)

身體爲土灰	身體	土灰と爲る
冥冥九泉室	冥冥たり	九泉の室
漫漫長夜臺	漫漫たり	長夜の臺
身盡氣力索	身盡き	氣力索 <small>つき</small>
精魂靡所能 <small>廻</small> <sup>一作</sup>	精魂	能くする所 <small>靡</small> <sup>な</sup>
嘉肴設不御	嘉肴	設くれども御 <small>やす</small> めず
旨酒盈觴杯	旨酒	觴杯に盈つ
出壙望故鄉	壙を出でて	故郷を望めば
但見蒿與萊	但だ蒿と萊とを見る	

（阮瑀）

このような死者の獨白形式は詩人獨自の着想である可能性もないではない。しかし、もう一つの可能性として、死者を一人稱とする語りや歌が既にあり、そこからきたとも考えられる。特に、阮瑀の詩の最後の死者が墓穴から出て故郷を眺めやるといふ部分は、先の死者の望郷を反映したものとみられて興味深いものといえよう。

#### 四

以上、五言古詩の内容と表現上の特徴を検討し、それが

死者儀禮にかかわる歌謠を一つのみなもととして成立したものであらうとの假説を提出した。ところがその肝心の漢代の葬歌などについては、私達はほとんど何も知ることができない。知り得るものはわずかに相和歌「薤露」「蒿里」の古辭二首と、そこに付された成立傳説その他の簡単な説明のみである。<sup>87</sup>これらの歌は非常に有名で、漢代の葬歌といえばまず必ず挙げられるものである。しかし、これら二首が、前後四百年にわたる漢代の死者儀禮にかかわる歌謠について知るのに十分でないことは言うまでもない。また、多くの相和歌が三國以降宮廷歌謠となつて『宋書』に著録されているのに對して、これらの二首はそこにもみえず他の相和歌にもまして素姓が知れないともいえる。漢代の死者儀禮、それはより廣く祖靈のまつりにまで範圍を擴大することが可能であらうが、そこでおこなわれた死者へのよびかけの歌、死を悲しむ歌、シャーマニズムの性格の残る死者の語りの歌、そして挽歌とよばれる道ゆきの歌などは、未だ想像の世界にあるのみである。

ところが、後漢についての歴史資料の中に葬歌について

抒情的五言詩の成立について（松家）

語る興味深い紀事が存在する。まず一つは『後漢書』周舉傳の次の條である。

（順帝の永和）六年（二四一）三月の上巳の日、梁商は盛大に客を招いて洛水で宴を催したが、周舉は病氣だと言つて行かなかつた。梁商は親しい者たちと酒を飲んで歡を盡くしたが、酒もまわつて出しものも盡きると、續いて「薤露の歌」を奏し、聴くものは皆涙を流した。太僕の張种もこの時そこに居あわせたが、歸るとこのことを周舉に話した。すると周舉は嘆きつづかう言つた。『哀樂時を失い、其の所に非ず』とはまさにこのことだ。きつと悪いことが起こるだろう。」と。果たしてその言葉どおり、秋になつて梁商は亡くなつた。<sup>88</sup>

ここにいう「薤露」も、必ずしも現在の相和歌の古辭と同一の物と考える必要はないであらう。また、これと同様のことが、『風俗通義』（佚文、『續漢書』五行志劉昭注の引用にみえる）にもみられる。

（靈帝の）當時（二六八—二八九在位）都では、賓客を迎

えての、あるいは婚禮に際してのおめでたい席ではどこでも魁檯をやり、宴もたけなわになると續いて挽歌を奏した。魁檯とは葬儀屋の音楽、そして挽歌は棺桶の紐を引く時聲をあわせてうたうものである。これは天が次のように警告したのだ。國家がまもなく滅びようとする時、貴族達の音楽は皆死にかかわるものになるのだと。靈帝崩御ののち都は壊滅、家々には死體が並びそこに蟲がわいた。魁檯と挽歌はその豫兆だったのであろうか。

一四一年政府の大立者梁商の宴で、そして靈帝の時には都の宴席ではどこでも葬歌が奏されたという。

先にも述べたように、五言古詩の成立に際しては宴席が重要な役割を果たしたことが推測される。また、五言古詩が、その起源はともかく最終的には洛陽を中心とする地域で完成したものであることも間違いないであろう。それは、當時の洛陽が都であったこと、五言古詩のちに曹操を中心とする魏の文學集團を主要な擔い手としてゆくことから予想され、また「古詩十九首」などの中に實際に洛陽の

描寫がみえることから知られよう。五言古詩の成立年代についても、無名氏の作と建安の詩人達との作との間には時間にして百年にも相當するほどの差違があるかは疑問であることなどから、一般には後漢後期が一應の完成期とされている。とすれば、後漢後期の洛陽の宴席は五言古詩の成立にとって非常に重要な場であつた可能性が高いということになる。前掲の二つの紀事を同じように扱つてよいものか疑問もあり、時間的場所的にかなり限定はされているものの、ここにいわれている宴席をただちに五言古詩成立の場と決めてしまうことはもちろんできないが、後漢後期の洛陽の宴席で葬歌が奏されたというこれらの紀事は、十分に検討に値するものといえるのではないだろうか。

これらの紀事で注意しなければならないのは、ここでは宴席と葬歌の結びつきが、いづれも、宮中で商人のまねごとをした靈帝の御亂心に類する偶發的な事件として扱われているが、實は葬歌と宴席はしばしば結びつくものであるということである。葬送歌が宴席で、あるいは娛樂としてうたわれた例は、次のように少くない。

張湛は家の前に好んで松柏を植え、同じ頃袁山松は出かける時好んでおつきの者に挽歌をうたわせた。そこで人々は次のようにいった。張さん家に屍しかばねならべ、袁さん道中おとむらい、と。<sup>40</sup>

『世説新語』任誕篇

袁山松は音楽が得意であつた。北方の古い歌に「行路難」の曲というものがあり、その歌詞はいささか粗野なものであつたが、山松はそれを好んで歌詞をこらし、ふしまわしも美しくした。そして酒がまわるといつもこれをうたい、聴く者は涙を流した。もともと羊曇は歌謠曲（倡樂）がうまく桓伊は挽歌が得意だったが、山松が「行路難」でこのあとに續ぎ、當時の人々は三絶と稱した。<sup>41</sup>

『世説新語』前項劉孝標注引『續晉陽秋』

宋緯は死後金城の南山の琅玕郡の役所のむかに葬られた。袁山松は琅玕の太守になったが、酔うといつても興に乗って宋緯の墓にのぼり「行路難」をうたつた。<sup>42</sup>

『俗説』

抒情的五言詩の成立について（松家）

張麟（湛）は酒を飲むと挽歌をうたつたが、それは悽愴きわまりなかった。そこで桓車騎（沖）は次のように言った。「君は田横の家来でもないのにどうしてすぐそうなるのか」と。<sup>43</sup>

『世説新語』任誕篇

（東晉の）武陵王（司馬）晞は失脚する四、五年前、好んで挽歌をうたい、自分で鈴を振ってはおつきの者達に唱和させていた。<sup>44</sup>

『太平御覽』卷五五二引『續晉陽秋』

これらの中でも特に興味深いのが袁山松に關するものである。袁山松は、あるいは「行路難」を得意としていたといい、あるいは挽歌を得意としていたという。しかし、「行路難」そのものが實は死者饗禮にかかわる歌であつたらしいことが、その歌を袁山松が墓の上でうたつたことから窺われるのである。「行路難」という名については、普通『樂府解題』にいう「世路の艱難」をうたうところから來るという解釋がなされている。しかし、前述のように人は死後道ゆきをするものとされていたところから考えれば、この「つらい道行き」とは元來人生のことをさしたもので

はなく、死後の道行き、あるいはそのアナロジーとしての野邊の送りであったことも十分に予想されるのである。

「行路難」の歌詞は、北方の歌謡としてのものはもちろん、袁山松の作も残ってはいないが、鮑照の有名な「擬行路難」十八首によってその性格の一端を窺うことができるのではないだろうか。それらは、おそらくその背後にあった歌謡に由來するものであろう強い調子をもつ雜言體の詩である。けれども、その全體の内容に注目すると、それは不思議に五言古詩の世界と似たものになっている。その多くは、時の移ろいやすく命のはかないこと、人が運命に支配されることをいう。墳墓をはじめ「死」と關聯する言葉が多くみえるのは、やはり死者儀禮にかかわる歌を起源とすることによるものであろうか。また、どうせはかない人生ならばまよ酒を飲んで楽しもうという内容も目立つ。これなどは「行路難」が非知識人的な歌謡から知識人を作者とする詩になる時に、その媒介となつた場「宴席」を反映したものと考えられよう。さらに、愛する者に去られた女性の嘆き、從軍兵士の望郷の思いもうたわれる。このよ

うに鮑照の「擬行路難」十八首の内容は、奇しくも「古詩十九首」以下の五言古詩の内容と大きく重なりあう。中でも次の詩などは特に「死」のイメージが色濃いものである。

君不見薜華不終朝 君見ずや 薜華 朝を終えず  
須臾奄冉零落銷 須臾にして奄冉 零落して銷ゆる

を

盛年妖豔浮華輩 盛年 妖豔 浮華の輩も  
不久亦當詣塚頭 久しからずして亦た塚頭に詣るべ

し

一去無還期 一たび去れば還るに期無く

千秋萬歲無音詞 千秋萬歲 音詞無し

孤魂竄竄空隴間 孤魂 空隴の間に竄竄たり

獨魄徘徊遠墳基 獨魄 徘徊して墳基を遶る

但聞風聲野鳥吟 但だ風聲と野鳥の吟を聞く

豈憶平生盛年時 豈に平生盛年の時を憶わんや

爲此令人多悲悵 此が爲に人をして悲悵多からしむ

君當縱意自熙怡 君 當に意を縱い<sup>ほ</sup>まに<sup>ほ</sup>して自ら

熙怡すべし

「一たび去れば還るに期無し」や「獨魄徘徊して墳基を遶る」など、五言古詩の類型的表現に似た句を用いながら「死」をうたい、最後に「有限な人生ならば楽しく過ごすがい」としめくくる。知識人である鮑照が「擬行路難」を作るにあたって先行する五言古詩の影響を受けたことはいうまでもない。しかし、「擬行路難」と五言古詩の類似は、兩者のより本質的なところにかかわるもので、單に模倣というだけでは片付けられぬものであろう。兩者が似ているのは、それらの成立過程が似ている爲であると、あるいは考えられるのではないだろうか。

宴席で、あるいはその他の場所で死者儀禮にかかわる歌が娛樂としてうたわれた例はこのように多くみられ、先にみた後漢の例も決してあまのじゃくがひき起こした偶發的なものではないと推測される。實際、死者儀禮にかかわる歌謡と宴席が結びつく要因がいくつかある。一番單純なのは、死者儀禮の歌といえども音樂である以上、そのまま娛樂となりうるということである。現在も上海郊外の南匯縣には「哭喪歌」と呼ばれるいわゆる泣き歌が残っている

抒情的五言詩の成立について（松家）

そうであるが、それはまた娛樂としてもうたわれるということである。死者儀禮には一般に宴席がともなうものであったことも、葬歌と宴席の接近を促した一因であらうか。葬送を職掌とする人々と音樂師などの藝能者が、社會の中で非常に近い位置にいたことも考える必要があるかもしれない。しかし、最も重要なのは、儀禮の中で行われていた歌謡などが何らかのきっかけでその儀禮が變質・崩壊したことにより藝能化するという現象である。前掲の例の多くは、このことと深くかわるものではないかと推察される。それは、その例の多くが永嘉の亂と晉の東遷という中國空前の大混亂の直後の時代、東晉期に集中していたからである。社會の崩壊にともなうて儀禮も崩壊し、藝能化がおこる。北方の葬送の曲である「行路難」が南朝に入りさかに奏されたこともまた、このことを背景としたものと考えられないだろうか。そして、後漢という時代もまた、豪族の土地兼併を大きな要因とする、急激ではないが重大な社會變革の時期である。その中で儀禮の崩壊と藝能化があらたみられたことは想像に難くない。



五言古詩成立までの流れの一つとして、死者儀禮にかかわる歌謡が宴席に入ったことを想定することも、あながち突飛なこととはいえないのではないだろうか。

以上、五言古詩の成立について述べてきたことをまとめると、次のようになる。まず、五言古詩には、その内容に、男女の離隔、時の推移・人生の短促、望郷、宴席という四つの特徴がみられることを指摘し、そのうち宴席の要素は、五言古詩が宴席という場を経て生まれてきたものであることとの反映と考え、他の三つについては、五言古詩の源流となった歌謡の性格を反映したものであると推測した。そして、それらの特徴と若干の状況證據とから、その歌謡とは死者儀禮にかかわるものであったのではないかという假説を導き出した。

後半は、五言古詩の完成にとって重要な時期であったろう後漢後期に、洛陽の宴席で死者儀禮とかわる歌がうたわれた紀事を、五言古詩との直接の關係については判断を保留しつつ挙げ、さらに、その他の類例から、死者儀禮に

かわる歌が宴席に入りこむことが決して偶発的なものではないことを示して、假説の補強を試みた。

もとより、最初にも述べたように、五言古詩の成立に關する問題はかなり複雑である。これまでの議論をなぞるだけに終わることを避けるために、本稿では敢えて扱わなかった五言というリズムの問題、そして成立年代の具體的検討という二つの大きな課題がある。また本稿で扱った問題でも『楚辭』や鏡銘との關係などはさらに詳しく検討すべきものであろう。いろいろな意味で未熟な假説ではあるが、廣く博雅の士の教えを乞うべく敢えてここに提出する次第である。

# 注

(1) 又古詩(佳麗、或稱枚叔、其孤竹一篇、則傳毅之詞)、比采而推、兩漢之作乎。

(2) 以下、小論では「古詩」は原則としてその第一句を題名のかわりとして挙げて示す。

(3) 「西門行」古詞

〔宋書〕樂志

「古詩十九首」

〔文選〕

出西門

歩念之

今日不作樂

當待何時

夫爲樂

爲樂當及時

何能坐愁悵鬱

當復待來茲

飲醇酒

炙肥牛

請呼心所歡

可用解愁憂

人生不滿百

常懷千歲憂

晝短而夜長

何不秉燭游

自非仙人王子喬

計會壽命難與期

人壽非金石

年命安可期

貪財愛惜費

但爲後世嗤

〔古詩十九首〕は「西門行」にあわせて句の順序を入れ替え、もとの順序を番號で示した。）

抒情的五言詩の成立について（松家）

(4) ここでいう五言古詩は、遂欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』漢

詩卷十二 古詩の範圍にほぼ相當する。但し、これはあくまで目安である。

(5) 『說詩晬語』 古詩十九首、不必一人之辭、一時之作、大率逐臣棄妻、朋友闊絕、游子他鄉、死生新故之感。

(6) 古川幸次郎「推移の悲哀——古詩十九首の主題」(『中國文學報』第十・十二・十四冊 一九五九・六〇・六一年のち『全集』第六卷 筑摩書房 一九六八)

(7) 『文選』に收録されたものを代表とするいわゆる李陵・蘇武の五言詩は偽作であることはば間違いないが、便宜上小論では「李陵・蘇武の五言詩」と呼ぶ。

(8) 青青陵上柏、磊磊澗中石、人生天地間、忽如遠行客、斗酒相娛樂、聊厚不爲薄、驅車策驚馬、遊戲宛與洛、洛中何鬱鬱、冠帶自相索、長衢羅夾巷、王侯多第宅、兩宮遙相望、雙闕百餘尺、極宴娛心意、感威何所迫。

(9) 『玉臺新詠』卷一 古詩八首之六 四坐且莫誼、願聽歌一言、請說銅鑪器、崔嵬象南山、上枝以松柏、下根據銅盤、雕文各異類、離婁自相聯、誰能爲此器、公輸與魯班、朱火然其中、青煙颺其間、從風入君懷、四坐莫不歎、香風難久居、空令蕙草殘。

なお、柳田國男「民謡覺書(二)」に酒宴にてその坐にある器物を題材にした歌について觸れており、この詩とあわせ讀むと興味深い(『柳田國男全集18』ちくま文庫 一九九〇)。ま

た、この詩については吉川幸次郎博士にも「古香爐詩」なる一文がある。(『全集』第六卷 筑摩書房 一九六八)

(10) 遡洄從之、道阻且長。

(11) 瞻望弗及、泣涕如雨。

(12) 傷時俗兮溷亂、將奮翼兮高飛。

(13) 兼葭、刺襄公也。未能用禮、將無以固其國焉。

(14) 言秋水方盛之時、所謂彼人者、乃在水之一方、上下求之而皆不可得。然不知其何所指也。

(15) 中國古典文學全集——『詩經・楚辭』平凡社 一九六〇。

(16) 漢廣、德廣所及也。文王之道被于南國、美化行乎江漢之域、無思犯禮、求而不可得也。(新注も古注に従う。)

(17) 三家詩説では「游女」を漢水の神とする。これが最も眞實に近いであろうことは後述のとおりである。

(18) 悲莫悲兮生別離、樂莫樂兮新相知。

(19) 路曼曼其脩遠兮、吾將上下而求索。

(20) 欲少留此靈瑣兮、日忽忽其將暮。

(21) 梅原未治「漢鏡とその文字」『書道全集』第二卷 平凡社 一九六五。小川環樹「漢代文學の一側面——鏡銘の抒情性」

(『風と雲——中國文學論集——』朝日新聞社 一九七二)。

(22) 鏡については、岡村秀典「前漢鏡の編年と様式」(『史林』第67巻 第三號 一九八四年九月)を参照した。それによれば、草葉文鏡Ⅱ、また後出の異體字銘帶鏡Ⅰともに紀元前百年頃のものだと推定されている。

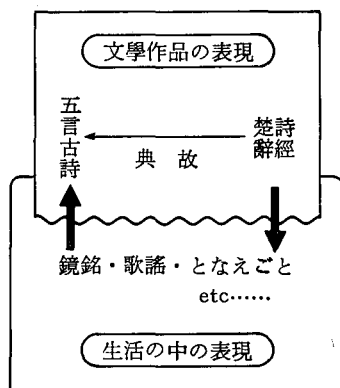
(23) 行行重行行、與君生別離、相去萬餘里、各在天一涯、道路

阻且長、會面安可知、胡馬依北風、越鳥巢南枝、相去日已遠、衣帶日已緩、浮雲蔽白日、遊子不顧反、思君令人老、歲月忽已晚、棄捐勿復道、努力加餐飯。

(24) この詩と鏡銘の關係を扱った論文として、石川三佐男「中國前漢『君有行鏡』の銘文について——古詩行行重行行篇との比較に及ぶ——」(『專修國文』第四十六號 一九八九)がある。

(25) 「努力加餐飯」には大きく分けて二通りの解釋がある。一、自分に言いかけせる言葉とするもの——呂延濟(『文選五臣注』、張庚(古詩十九首解)、鈴木虎雄(玉臺新詠集、岩波文庫)など。「しつかり食べて容色が衰えぬようにしようとするのだ」などという説明もみられ、解釋に苦心している様子が窺われる。二、相手にむかって言った言葉とするもの——朱自清(古詩十九首釋)、馬茂元(古詩十九首初探)、吉川幸次郎(前掲「推移の悲哀」)など。ここでは、後述する理由にもより第二説に従う。

(26) 『詩經』『楚辭』と五言古詩の關係について、筆者は次のように豫想している。



(27) 「漢廣は、祭禮詩から戀愛詩への傾斜をみせるものであると思う。游女については、韓詩説の方に興味をもたれる。詩は秦風兼葭と似たところがあり、漢水の女神を祀る祭禮から歌い起して、二・三章に至って、采薪から結婚の主題に入る。しかも及びえぬ女神への思慕を、各章末の長いリフレインに歌う。おそらくもと祭禮において、女神への愉悅を歌ったもので、後の楚辭九歌の湘君・湘夫人は、この系統に屬する祭祀歌である。このような水神祭祀は、古く雍・豫・荆の諸水域に行なわれていた。祭禮の歌、神々への愉悅が戀愛的發想をとることは、古代の祭禮歌に多く見られることである。」

『詩經研究』通論篇 朋友書店 一九八一。

(28) 惟熹平六年、歲格于大荒、无射之月、堂邑令費君寢疾卒。

(後略)

抒情的五言詩の成立について (松家)

(29) 「費鳳別碑」についての論文としては、小池一郎「費鳳別碑と五言律の成立」(『同志社外國文學研究』33・34合併號一九八二年二月)がある。

(30) 前掲「推移の悲哀」の中で、その「悲哀」を三つに分類し、その三番目を「人間の一生は、さいごの不幸として死へと推移する時間であるとする悲しみ。」と名づけられる。

(31) 詩の後半略した部分を挙げる。

浩浩陰陽移、年命如朝露、人生忽如寄、壽無金石固、萬歲更相送、聖賢莫能度、服食求神仙、多爲藥所誤、不如飲美酒、被服紉與素。

(32) 西京亂無象、豺虎方遘患、復棄中國去、遠身適荆蠻、親戚對我悲、朋友相追攀、出門無所見、白骨蔽平原、路有飢婦人、抱子棄草間、顧聞號泣聲、揮涕獨不還、未知身死處、何能兩相完、驅馬棄之去、不忍聽此言、南登霸陵岸、迴首望長安、悟彼下泉人、喟然傷心肝。

「七哀詩」については、この他阮瑀のものが後述のように死者の獨白形式となっているのをはじめ、『文選』所載の張載のものが「北芒何壘壘、高陵有四五」と墓の形象ではじまり、『北堂書鈔』卷九十二に斷片的に残る傳玄のものが「杳杳三泉室、冥冥玄夜堂」となっているなど、特に「死」とかわりが深いものが多い。

(33) たとえば、三國時代の東北異民族烏丸の他界觀をあらわす葬送儀禮に次のようなものがある。

貴兵死、斂屍有棺、始死則哭、葬則歌舞相送。肥養犬、以

采繩嬰牽、并取亡者所乘馬、衣物、生時服飾、皆燒以送之。

特屬累犬、使護死者神靈歸乎赤山。(中略)至葬日、夜聚親舊

員坐、牽犬馬歷位、或歌哭者、擲肉與之、使二人口頌呪文、

使死者魂神徑至、歷險阻、勿令橫鬼遮護、達其赤山、然後殺

犬馬、衣物燒之。『三國志』烏丸傳注引『魏書』

(34) 辛未、幸太山、柴告岱宗、有黃鵠三十從西南來、經祠壇上、

東北過于宮屋、翺翔升降。

(35) 「豔歌何嘗行」古辭(『宋書』樂志)

飛來雙白鵠、乃從西北來、十五五、羅列成行。(後略)

また有名な長篇詩の「孔雀東南飛」もこの形の展開したものと

いえよう。

(36) 【忌哭】安徽壽縣舊時喪葬儀規。認爲人死入殮後第三日、

死者之魂須上望鄉臺、故此時家人忌哭、(以爲死者原不知己

死、及上望鄉臺時、方知身爲鬼魂而黯然神傷、若家人泣哭、

則死者心中愈悲。)(鄭傳寅・張健主編『中國民俗辭典』湖北

辭書出版社 一九八七)

(37) 崔豹『古今注』(『文選』卷二八陸機挽歌詩李善注引)

薤露蒿里、並喪歌、出田橫門人、橫自殺、門人傷之、爲之

悲歌、(中略)故有二章、其一曰、薤上朝露何易晞、露晞明

朝更復落、人死一去何時歸、其二章曰、蒿里誰家地、聚斂魂

魄無賢愚、鬼伯一何相催促、人命不得少踟躕、至李延年乃分

二章爲二曲、薤露送王公貴人、蒿里送士大夫庶人、使挽柩者

歌之、世亦呼爲挽歌也。

(38) 六年、三月上巳日、商大會賓客、讌于洛水、舉時稱疾不往、

商與親暱酣飲極歡、及酒闌倡罷、繼以薤露之歌、坐中聞者、

皆爲掩涕、太僕張种時亦在焉、會還、以事告舉、舉歎曰、此

所謂哀樂失時非其所也、殃將及乎、商至秋果薨。

(39) 時京師賓婚嘉會、皆作薤檉、酒酣之後、續以挽歌、薤檉、

喪家之樂、挽歌、執紼相偶和之者、天戒若曰、國家當急疹悴、

諸貴樂皆死亡也、自靈帝崩後、京師壞滅、戶有兼屍、蟲而相

食、薤檉、挽歌、斯之效乎。

(40) 張湛好於齋前種松柏、時袁山松出遊、好令左右作挽歌、時

人謂、張屋下陳屍、袁道上行殯。

(41) 袁山松善音樂、北人舊歌有行路難曲、辭頗疏質、山松好之、

乃爲文其章句、婉其節利、每因酒酣、從而歌之、聽者莫不流

涕、初羊曇善倡樂、桓伊能挽歌、及山松以行路難繼之、時人

謂之三絕。

(42) 宋棣死後、葬在金城南山、對琅玕郡門、袁山松爲琅玕太守、

每醉輒乘輿上宋棣冢、作行路難歌。

(43) 張麟酒後、挽歌甚悽苦、桓車騎曰、卿非田橫門人、何乃頓

爾至致。

(44) 武陵王晞未敗四五年、喜爲挽歌、自搖鈴使左右和之。

(45) 「行路難」のほか、六朝の吳聲歌曲の一つ「讀曲歌」も、

その中にいくつかの死や葬禮にかかわる物名がみえること、

その二つの成立傳説が兩方とも人の死をきっかけとしている

ことなどから、もとは葬歌であったとする説がある。（王運熙「吳聲歌曲雜考」『六朝樂府與民歌』上海文藝聯合出版社一九五五）。

(46) たとえば、孫楷第『傀儡戲攷原』（上雜出版社 一九五二）においても、前掲靈帝時の紀事について「然則靈帝時京師嘉會之用魁檯、以其爲舞劇耳、緣重其伎、故不復以喪家樂爲嫌。」「此時、魁檯性質已近於百戲、又後則變爲娛人。」と既に一般に娛樂として認識されていたであろうことをいう。これは「挽歌」についても同様であろう。

(47) 上海民間文藝家協會・上海市南匯縣文化館編『哭喪歌』（上海文藝出版社 一九八八）姜彬序  
在這箇地方、《哭嫁歌》和《哭喪歌》已經成了本地人民的一種文化娛樂方式、不但在舉辦婚喪喜事的時候唱、平時在勞動時、如田頭楊花、細上綉花時也唱這種歌。

（補）注に引いたもの以外の重要な參考文獻として西岡弘『中國古代の葬禮と文學』（三光社 一九七〇）をあげておきたい。